

Ⅱ類Ⅰ類制度を作った学校側の判断は正しかったのか？

学力別クラス編成の分析から

第1章 はじめに

私達高校 66 期の代から都市大付属中高(以下本校)において、学力別クラス編成を導入することとなった。いわゆるⅡ類Ⅰ類¹に分けるクラス制度である。Ⅱ類のクラスの方が成績の良い生徒で構成されている。私達の学年では、中学入試の出来でⅡ類を1クラス選抜し、その後は1年ごとに成績優秀者をⅡ類へ昇格させていった。この制度は頭の良い子の才能を開花させていった一方で、下のクラスへ振り分けられた者のやる気を削ぎ、結果として同じ入試を通過してきた、ほぼ同程度の学力の生徒らの成績の差を拡大してしまった。私達が大学受験を控えている中、この差は大学をはじめ個々の将来や人生にまで大きな影響を与えることだろう。

「Ⅱ類Ⅰ類制度を作った学校側の判断は正しかったのか？」というテーマに対し、私は「いいえ、学校側の判断は正しくなかった。」という仮説を立てた。それは、学年六組の授業姿勢の違いや平均点の大幅な差を見たり聞いたりしたからである。ただ調査をした中で、この仮説は基本的には合っていたが、Ⅱ類創設時期が高1からだったら違った結果になった可能性があることもわかった。

この論文では各章で以下の点を論点として扱う。第2章では、学力別クラス編成²のメリット・デメリットを考察する。メリットとは分散効果の危険がないこと、デメリットはピア・グループ効果の危険があることである。第3章では第2章を踏まえた上で、学力別クラス編成の簡単なモデルを作った。この章で、数式計算を入れざるを得なかったことをご容赦願いたい。第4章では、第2章・第3章で述べたことを、我が校での具体的な事象と照らし合わせて、本校においてのⅡ類Ⅰ類制度はクラス分けのデメリットの方が強いことを示す。入学当初は各生徒の間に大きな成績の差がなかった点、だがその中の僅かな差にこだわって、学校側がクラス分けを実施したという事実を述べる。第5章では、以上を踏まえての結論を導き、今後の展望を述べる。

第2章 学力別クラス編成のメリットとデメリット

この章では、小塩隆士『教育を経済学で考える』(日本評論社 2003年)を参考に、学力別クラス編成のメリット・デメリットについて考察していく。

○ 学力別クラス編成のメリット

まず、学力別クラス編成のメリットとは何だろうか。それは、同じ学力の生徒を揃えることにより、どの学力レベルのクラスであっても理解度が向上する。分散効果ははたらく危険がないのである。

分散効果を説明しよう。仮に各生徒の学力が大きく違っていると、教えることが難しくなる。学力が高い者に授業レベルを合わせると、できない者はついていけない。一方学力が低い者に授業レベルを合わせれば、既に理解しているできる者は退屈し興味を失う。だから必然的に真ん中の学力に合わせる授業となるが、そうなるとできる者もできない者も授業から心が離れてしまう。先生も授業をやりづらい。このように様々な学力が混ざる均等クラスで、自分とレベルが合わないことで授業を相手にしなくなる生徒が増え、授業効率が下がるというこ

とを分散効果と呼ぶ。学力の分散が高ければ高いほど、分散効果による悪影響も大きくなる。

学力別クラス編成の試みは本校のみならず全国各地で行われている。各生徒の学力に応じたクラス編成を行うと、結果として全体の平均点も高まるという結果もしばしば報告されているようだ。学力が高いクラスは教科書にない発展的な内容を扱い、更に磨きをかけることができる。一方学力の低いクラスは先生がどんどん先に進むことがなくなって基礎力を固める授業が展開されるので、理解度が上がる。

このように学力別クラス編成は各生徒の学力に応じて効率的に指導することにより、全生徒の学力を高めることが可能である、というメリットを持っているのだ。混合クラスで分散効果によって何を授業で言っているのかさっぱりわからなかった人が、学力別の下で基礎レベルから復習することできちんと理解できるようになるなら、それは喜ばしい話である。

○ 学力別クラス編成のデメリット

では、学力別クラス編成のデメリットとは何だろうか。それは学力が低いクラスの全体的な士気が低下し、学力が高いクラスとの差が開いてしまうという、ピア・グループ効果がはたらいってしまうことである。

ピア・グループ効果とは言ってしまうと「朱に交われば赤くなる」ということである。人間はそれほど強い存在ではない。周囲の影響に大きく左右される。まして高校生くらいまではしっかりした自己が確立されていない。つまり、ピア・グループ効果とは周りの友達によって自分の学力へ与える影響のことなのだ。

例えば、学力が高いクラスはピア・グループ効果を正の方向に発揮される場であると言っていい。互いが互いに刺激しあい、クラスとしての士気も上がり、ライバル意識が芽生え、結果として全員が更に良い学力になるだろう。しかし、学力が低いクラスはどうだろうか。均等クラスで学力が高い人が何人かいて、少なからず正の刺激を受けていたかもしれないが、こうした刺激がなくなってしまった。むしろこのような中で真面目にやっていると、優等生ぶりやがってといじめを受けるのが目に見えている。だからクラスの士気も下がり、だらけてしまうだろう。つまり、負の方向にピア・グループ効果がはたらくということになる。

もちろんメリットのところでも述べた通り、学力が低いクラスもレベルにあった指導を受けているのだから、学力自体が下がるということはない。だが負の影響を受ける学力が低いクラスは、正の影響を受ける学力が高いクラスと比べて学力自体の伸びは小さくなる。そうなると、もともとあった学力が高いクラスと低いクラスの差は、ピア・グループ効果によって更に大きく開くことになってしまう。

このように、学力別クラス編成は効率的な指導によって全体の学力水準を高める一方で、各クラス単位の士気に影響し、もともとある学力差を埋めるどころか拡大する要因になっているのである。今まで、同程度の学力の者同士をひとクラスにまとめる学力別クラス編成のメリットとデメリットを記述した。このメリットとデメリットのどちらが勝るのかは状況により異なる。次の章では学力別クラス編成について、数式を使って簡単なモデル化を行なう。

第3章 学力別クラス編成についての簡単なモデル

この章では先ほど述べた分散効果とピア・グループ効果について直感的に理解するためのモデル化を行う。ある簡単なモデルにおいて、学力別クラスにしたときと混合クラスにしたときに場合分けし、個人にどれだけの教育成果（テストの点・成績）が現れるかを考察していく。

但、最初の教育の生産関数の項については小塩隆士『教育の経済分析』（日本評論社 2002年）を要約している。また、簡単なモデル化の項については、同文献に記述されていたモデルを単純化し、教育の生産関数を $A = sp$ と独自に設定することで、教育成果についての分析を行なっている。

○ 教育の生産関数

最初に、教育成果を分析する基本的な枠組みを考える。教育成果とは、テストの点数などを想像してほしい。一般的には、その個人の成績 A は本人が生まれながらにして持っている能力・生活環境 S 、学校で提供される教育の質 Q （学校図書館の蔵書量・教員の教育水準など）、一緒に教育を受けるグループの特性 P によって決定されると考えられている。

つまり A, S, Q, P において、

$$A = f(S, Q, P)$$

という関係が考えられる。そして、この関数 $f()$ は S, Q, P をインプットとして A をアウトプットとする教育の生産関数と考えることができる。教育成果を説明するきちんとした経済理論は存在しないので、この $f()$ の中身を具体的に定式化することは不可能である。そのため分析者が $f()$ の中身の式について想定する形になる。 P が A に及ぼす効果を前章でピア・グループ効果とやってきたわけである。次の項では、この関数を簡単な形に置き換えてみて、学力別クラス編成を見て行くものとする。

○ 簡単なモデル

ここでは、ピア・グループ効果が教育成果に及ぼす影響を直感的に理解するために、次のようなモデルを考えよう。

- ・生徒4人（甲・乙・丙・丁）がいるものとする。
- ・元々の4人の学力（前項においての S ）について、甲・乙は学力が高くいずれも $s_{高}$ 、丙・丁は学力が低くいずれも $s_{低}$ とする。（ $s_{低} < s_{高}$ ）
- ・この状況下で、4人を2人ずつ松組と梅組の2組に分ける。（※）
- ・総予算は各組に均等に割り振られるものとするので、前項の教育の質 Q に関する部分は無視をしておく。
- ・前項で述べた周囲からの影響 P については、クラスの平均点がわかりやすい指標なので、松組の平均点を $p_{松}$ 、梅組の平均点を $p_{梅}$ とする。
- ・以上から生まれる教育成果について、甲の教育成果は $A_{甲}$ 、乙の教育成果は $A_{乙}$ 、丙の教育成果は $A_{丙}$ 、丁の教育成果は $A_{丁}$ とおく。

ここにおいては、教育の生産関数は、個人の教育成果 A がその人の元々の学力 s と、周囲からの影響度を示すク

ラス平均点 p から掛け合わされることを想定し、

$$A = sp$$

としておこう。

以下において、(※)のクラス分けのやり方、分散効果の反映の有無で場合分けをする。

学力別クラスにする場合は分散効果が生まれないので1通りに、混合クラスにする場合は分散効果がない場合とある場合の2通りに場合分けをしている。

i) 2組を学力別クラス編成にした場合(松組には甲・乙、梅組には丙・丁)

$$\text{松組の学力平均 } p_{\text{松}} = \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{高}}}{2} = s_{\text{高}}$$

$$\text{梅組の学力平均 } p_{\text{梅}} = \frac{s_{\text{低}} + s_{\text{低}}}{2} = s_{\text{低}}$$

よって今回想定した生産関数より、

$$\text{甲の教育成果 } A_{\text{甲}} = s_{\text{高}} \times p_{\text{松}} = s_{\text{高}}^2$$

$$\text{乙の教育成果 } A_{\text{乙}} = s_{\text{高}} \times p_{\text{松}} = s_{\text{高}}^2$$

$$\text{丙の教育成果 } A_{\text{丙}} = s_{\text{低}} \times p_{\text{梅}} = s_{\text{低}}^2$$

$$\text{丁の教育成果 } A_{\text{丁}} = s_{\text{低}} \times p_{\text{梅}} = s_{\text{低}}^2$$

となり、もともとあった甲乙と丙丁間の学力差 $s_{\text{高}} - s_{\text{低}}$ が $s_{\text{高}}^2 - s_{\text{低}}^2$ にかいていることになる。

ii) 2組を混合クラスにして分散効果を見捨てる場合(松組には甲・丙、梅組には乙・丁)

$$\text{松組の学力平均 } p_{\text{松}} = \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2}$$

$$\text{梅組の学力平均 } p_{\text{梅}} = \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} \quad (p_{\text{松}} = p_{\text{梅}})$$

よって今回想定した生産関数より、

$$\text{甲の教育成果 } A_{\text{甲}} = s_{\text{高}} \times p_{\text{松}} = s_{\text{高}} \times \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} = \frac{1}{2}(s_{\text{高}}^2 + s_{\text{高}}s_{\text{低}})$$

$$\text{乙の教育成果 } A_{\text{乙}} = s_{\text{高}} \times p_{\text{梅}} = s_{\text{高}} \times \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} = \frac{1}{2}(s_{\text{高}}^2 + s_{\text{高}}s_{\text{低}})$$

$$\text{丙の教育成果 } A_{\text{丙}} = s_{\text{低}} \times p_{\text{松}} = s_{\text{低}} \times \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} = \frac{1}{2}(s_{\text{低}}^2 + s_{\text{高}}s_{\text{低}})$$

$$\text{丁の教育成果 } A_{\text{丁}} = s_{\text{低}} \times p_{\text{梅}} = s_{\text{低}} \times \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} = \frac{1}{2}(s_{\text{低}}^2 + s_{\text{高}}s_{\text{低}})$$

となり、もともとあった学力差 $s_{\text{高}} - s_{\text{低}}$ が $\frac{1}{2}(s_{\text{高}}^2 + s_{\text{高}}s_{\text{低}}) - \frac{1}{2}(s_{\text{低}}^2 + s_{\text{高}}s_{\text{低}}) = \frac{1}{2}(s_{\text{高}}^2 - s_{\text{低}}^2)$ にかいていることになる。

iii) 2組を混合クラスにして分散効果を考える場合(松組には甲・丙、梅組には乙・丁)

この場合、分散効果による非効率性を考慮してクラスの学力平均にマイナスが生じると考える。

ここでは、

$$\text{松組の学力平均 } p_{\text{松}} = \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} - k \frac{s_{\text{高}} - s_{\text{低}}}{2}$$

$$\text{梅組の学力平均 } p_{\text{梅}} = \frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} - k \frac{s_{\text{高}} - s_{\text{低}}}{2} \quad (p_{\text{松}} = p_{\text{梅}}) \text{ (但、} k \geq 0 \text{)}$$

とし、能力の散らばりの k 倍がピア・グループ効果の源泉である能力の平均値を引き下げるという考え方をする。分散効果が全くなければ $k = 0$ で ii の場合と同じになる。分散効果が大きくなればなるほど k の値も大きくな

り、分散効果によってクラスの学力平均が、学力の低い生徒のそれと一致してしまったのが $k=1$ の状態である。

よって、

$$\begin{aligned} \text{甲の教育成果 } A_{\text{甲}} &= s_{\text{高}} \times p_{\text{松}} = s_{\text{高}} \times \left(\frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} - k \frac{s_{\text{高}} - s_{\text{低}}}{2} \right) = \frac{1}{2} \{s_{\text{高}}^2(1-k) + s_{\text{高}}s_{\text{低}}(1+k)\} \\ \text{乙の教育成果 } A_{\text{乙}} &= s_{\text{高}} \times p_{\text{梅}} = s_{\text{高}} \times \left(\frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} - k \frac{s_{\text{高}} - s_{\text{低}}}{2} \right) = \frac{1}{2} \{s_{\text{高}}^2(1-k) + s_{\text{高}}s_{\text{低}}(1+k)\} \\ \text{丙の教育成果 } A_{\text{丙}} &= s_{\text{低}} \times p_{\text{松}} = s_{\text{低}} \times \left(\frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} - k \frac{s_{\text{高}} - s_{\text{低}}}{2} \right) = \frac{1}{2} \{s_{\text{低}}^2(1+k) + s_{\text{高}}s_{\text{低}}(1-k)\} \\ \text{丁の教育成果 } A_{\text{丁}} &= s_{\text{低}} \times p_{\text{梅}} = s_{\text{低}} \times \left(\frac{s_{\text{高}} + s_{\text{低}}}{2} - k \frac{s_{\text{高}} - s_{\text{低}}}{2} \right) = \frac{1}{2} \{s_{\text{低}}^2(1+k) + s_{\text{高}}s_{\text{低}}(1-k)\} \end{aligned}$$

となり、もともとあった学力差 $s_{\text{高}} - s_{\text{低}}$ が

$$\frac{1}{2} \{s_{\text{高}}^2(1-k) + s_{\text{高}}s_{\text{低}}(1+k)\} - \frac{1}{2} \{s_{\text{低}}^2(1+k) + s_{\text{高}}s_{\text{低}}(1-k)\} = \frac{1}{2} \{s_{\text{高}}^2(1-k) - s_{\text{低}}^2(1+k) + 2ks_{\text{高}}s_{\text{低}}\}$$

に開いていることになる。(但、 $k \geq 0$)

ここでまとめをする。

もともとあった甲乙と丙丁間の学力差 $s_{\text{高}} - s_{\text{低}}$ は、

$$\begin{aligned} \text{i) 学力別クラス編成にした場合} & \quad s_{\text{高}}^2 - s_{\text{低}}^2 \\ \text{ii) 混合クラスにして分散効果を考えない場合} & \quad \frac{1}{2}(s_{\text{高}}^2 - s_{\text{低}}^2) \\ \text{iii) 混合クラスにして分散効果を考える場合} & \quad \frac{1}{2} \{s_{\text{高}}^2(1-k) - s_{\text{低}}^2(1+k) + 2ks_{\text{高}}s_{\text{低}}\} \quad (\text{但、} k \geq 0) \end{aligned}$$

に変化することとなり、i の場合が最も大きくなっている。ii は i の半分になることは解るだろう。iii に関して、i の式から iii の式を引くと正の値になるから、iii も i より小さい。つまりこれが学力別クラス編成のデメリット、学力格差が拡大するということなのだ。だがこれをもって学力別クラス編成を絶対悪とすることはしない。

学力が低い生徒(丙・丁)の教育成果を見てみると、

$$\begin{aligned} \text{i) 学力別クラス編成にした場合} & \quad s_{\text{低}}^2 \\ \text{ii) 混合クラスにして分散効果を考えない場合} & \quad \frac{1}{2}(s_{\text{低}}^2 + s_{\text{高}}s_{\text{低}}) \\ \text{iii) 混合クラスにして分散効果を考える場合} & \quad \frac{1}{2} \{s_{\text{低}}^2(1+k) + s_{\text{高}}s_{\text{低}}(1-k)\} \quad (\text{但、} k \geq 0) \end{aligned}$$

の教育成果となっている。ii の場合は i の場合より必ず大きい値となる。だがどうだろう、 $k > 1$ のとき(混合クラスにおける分散効果が大きいとき)、iii の場合は i の場合より小さくなってしまっているではないか。つまり分散効果の大きさによっては学力別クラス編成の方が、学力が低い生徒の教育成果が得られるということである。

このように見ていくと、学力差が広がるという意味で学力別クラス編成は良くないことだが、分散効果による非効率化を考えると、学力が低い者にとっても混合クラスが絶対良いとは言えない。要するに問題なのは分散効果の大きさ(先ほどのモデルにおいて k の値)なのだ。つまり学力の高い者と低い者と言っても、入学時にどれくらい差があるのかということだ。差が大きいなら学力別クラスにして授業の効率性を高め、差が小さいなら混合クラスで差を広げないよう努力をしていくのが良いということである。

第4章 本校のⅡ類Ⅰ類制度

では、上で述べたことを、本校第66期のクラス分けに即してみたい。結論から申せば、入学当初の高校66期(中学58期)は学力差が小さかったので、学力別クラス編成のデメリットつまりピア・グループ効果ばかりが押し出されてしまう環境だったということである。

まず、入学段階では各生徒の学力差はあまりなかった。なぜなら、偏差値的に考えると、本校への入学対象者があつた学力で輪切りされたきまつた範囲の学力に定まる可能性が高いからだ。例えば、入学時にずば抜けて優秀な人は、本校より上の学校に進学していた可能性が高いということだ。(逆に、一番高い学校は上がどこまで突き抜けているのかわからないということでもある。) 少なくとも、2013年度の本校の偏差値は59~62³とずば抜けて高いわけでも低いわけでもなく、真ん中よりちょっと上という位置にある。だから、本校には概ね決まつた範囲の学力が集結していると考えて良い。つまり、入学当初、高校66期(中学58期)の259人の学力差はほぼなかったと言って良いだろう。

だが、この中から入試の成績でⅡ類を1組設けて中1時をⅡ類1組・Ⅰ類5組体制に、1年後には中1の成績でもう一つⅡ類を選抜して中2時はⅡ類2組・Ⅰ類4組体制になった。更に中3ではⅡ類増設こそしなかつたものの、Ⅱ類の中で上位の組を、Ⅰ類の中で下位の組を設定してしまつた。

本校は中高一貫校で高3時は全面的に大学入試対策をする。そのため高2までで6カ年教育を終了させる計画になっている。だから、公立の中学3年間の内容を中2までに収めることになっている。つまり本校の場合、中3から高校の内容に入るため、中3から難易度が上昇するという事になっている。要するに、学力の差が大きくなるのも中3からだ。

以上のことより、中1から学力別クラス編成を実施し、結果的に中学の成績で人生を決める状況になっていることを私は抗議したい。クラス内の各生徒の学力が分散しすぎていると授業効率が悪く、学力別クラス編成によって全体的な理解度をあげられるというメリットは、前で述べた通りだ。そして各生徒の学力があまり分散しておらず、平均に近い場合に学力別クラス編成を実施しても、メリットはないことも先に示した。むしろ「自分は学力が低い」というレッテルを貼り付けることで、学力が低いクラス全体の士気が低下し、ピア・グループ効果の負の側面が圧倒的に現れる。実際に高校66期(中学58期)では、入学当初差は小さかつたので、Ⅱ類Ⅰ類に分けた結果、ピア・グループ効果の悪影響が押し出されたわけだ。中1・中2の差が小さな成績に拘ってクラス分けをした結果、デメリットばかりがあらわれる結果となつてしまつた。大学受験が差し迫る中、差はどんどん開く一方なので、中1中2の成績で将来や人生が決まってしまうと言っても過言ではないのだ。成績差は各個人の努力の問題だという反論もあるだろう。確かに根本の原因は各個人の勉強量にあると言って良い。だが同じ料金を取つて授業をしているわけなのだから、差を広げさせる一方の環境を作つてやる気を喪失させるクラス編成を実施した学校側にも問題があると言ってもいいのではないか。各個人の将来を考えた上で、結果的には中学時代から成績差を広げて将来の進路にまで影響してしまつていることはⅡ類Ⅰ類制度の大きな問題点であるといえる。

ただし、中3まで混合クラス、高1から学力別クラスというカリキュラムなら願くことはできた。本校では高校の内容に入る中3の一年間で成績差が圧倒的に開くので、その開いた成績を基に高1で学力別クラス編成にするのであれば、学力別クラス編成のメリットを生かせるからだ。

第5章 結論と今後の展望

本稿のテーマ「Ⅱ類Ⅰ類制度を作った学校側の判断は正しかったのか？」という疑問に対し、「いいえ、間違っている。但、Ⅱ類Ⅰ類制度を開始する学年が遅かったら違っていただろう。」という答えになる。

学力別クラス編成ではピア・グループ効果が常にあらわれるので、学力別クラスと混合クラスのどちらが良いかは、混合クラスで非効率を生み出す分散効果の度合いによって決まる。つまり、学力の高い生徒と低い生徒の学力差だ。学力差が大きければ大きいほど学力別にクラスを分け、小さければ混合クラスにするのが望ましい。だがこの学校では学力差が小さい入学時の段階で学力別クラス編成(Ⅱ類Ⅰ類)を実施している。そのためピア・グループ効果によって学力差が増すばかりの環境、中学の小さな成績差を将来に引きずる環境になっているのだ。これは本校の建学の精神である「公正」にあたるのだろうか。一方、学力差がはっきりとしてくる高1まで混合クラスだったら、学力が低いとされる人にとっても良い環境になっていた。高校内容に入る中3の一年間で成績差がぐんと開くからだ。学力別クラス編成が良いか悪いかは、場面に応じて決定されるべきで、絶対善・絶対悪としてとらえるべきではない。Ⅱ類Ⅰ類制度を入学時から行なってしまった本校においては、たまたま悪い影響となってしまったということである。

だがこのⅡ類Ⅰ類制度下で大学受験を迎えておらず、具体的な実績については示されていないし、未来のことについては示しようもない。私達の代が卒業したとき、Ⅱ類Ⅰ類制度によってどれだけ大学進学にいい影響・悪い影響を及ぼしたかを検証し、後輩たちに生かしていただきたい。

第6章 おわりに

本稿では、自分の通う中学・高校で行われているクラス制度というとても身近な話題を取り上げた。おそらく本稿はⅡ類Ⅰ類制度に対して批評をした数少ない論文だったように思われる。また、数式を使うなどして、難解な内容になってしまったことは素直にお詫びを申し上げたい。

本稿で考察しきれなかったことは、言うまでもなく本当の教育生産関数の姿である。私は今回 $A = sp$ という形を「想定して」論を進めた。私が探した文献も何らかの形で教育成果の関数を「想定して」話を進めており、私が見た限りでは教育生産関数自体を証明していた文献はなかった。このことの原因には、具体的なデータを収集しきれないことがあげられる。生徒の成績に関するデータを集め、教育生産関数の証明ができれば、さらに深い議論が想定される。本稿を出して終わりにせず、学力別クラス編成についての議論が深まることを切に願う。最後までお読みいただいたことに感謝申し上げます。

[注釈]

- 1 本校が大学実績向上を目的に実施する学力別クラス編成。Ⅱ類は応用講座が必修になっておりⅠ類より難易度が高い。
- 2 クラスを同程度の学力の生徒で構成する制度。これに対し混合クラス制は様々な学力の生徒が同クラス内にいる。

3 <http://www.syutoken-mosi.co.jp/station/data/hensa/upload/pdf/dansi201304.pdf>

「2013年中学入試 結果偏差値一覧」

2016年8月30日アクセス

[参考文献]

- ◆ 小塩隆士『教育を経済学で考える』（日本評論社 2003年）
- ◆ 小塩隆士『教育の経済分析』（日本評論社 2002年）
- ◆ 佐藤学『習熟度別指導の何が問題か』（岩波書店 2004年）
- ◆ 篠上芳光『絶対エリート主義』（実業之日本社 2004年）
- ◆ 山口真由『いいエリート、わるいエリート』（新潮新書 2015年）
- ◆ 林修『受験必要論』（集英社 2013年）
- ◆ 井堀利宏『大学4年間の経済学が10時間でざっと学べる』（株式会社KADOKAWA 2015年）
- ◆ 北條雅一「学力の決定要因」
- ◆ 坪沼妙子「教育の経済学的分析」